
カラクリ。夕暮れ暮れる

白紙描写

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

カラクラリ。夕暮れ暮れる

【Zコード】

N7033W

【作者名】

白紙描写

【あらすじ】

高校の観手は、みてみれば、全然、寂しい人生ではなかつた、を描いた。物々しく荒々しい物語るーと

カラクリー（前書き）

これまでの法則を打ち破る、それ

カラクリ1

バイオレンスな日常に、憧れていたわけではない。

ただし、それは、平凡な生活に人生としての生命力を費やすことでも、ただ、何気に面白い可笑しく生きてみたいだけの話だったのだ。

僕は、観手ミテ上の名は、白州川。
シラスガワ

繋げて、白州川 観手。

生意気な子供達が戯れ、後を行く。
どうせ、僕がその後、越して、子供等の無邪氣な声は、どこか遠くに、消えてしまつのだ。

「あーあ、お空がとつても、オレンジだ」

今日も一日の終わり。何か物足りなさ覚えながら、一步一歩、帰宅路を踏みしめる…

何か起きて欲しい。けれど、今のままが良い、と言うのは、やはり、贅沢な妄想に過ぎないのであるづ。

想像力とは、単なる11次元の細波に過ぎないことは確かだ。

意味もなく。有り得ない理想の空虚。けれど、人はそれでしか生きていけないので。

ああなればいいは、ああすれば良いに変わる。偏屈なものさ、

あれ？結構、夕暮れの光景は眩しいな。

河川敷の隣の隣りのそれまた隣の隣の敷地に、僕の僕自身の家族の家がある。

「ハイパー帰宅学生とは、僕のことさ」

独り呟くのは、等しく寂しい。

この物語は、厚き友情と眩いばかりの個性の人々と莫大的なギミックな物語)

「

カラクリ2（前書き）

本格的な小説は、僕には、無理かもしだい

カラクリ2

土曜日

今日はうつかり、学校へ行く支度を整え、私宅から学校へ向かう。ちよつと前までのところまで、来てしまったところだ。

今日は、土曜日でそれ以外の何者でもないのだ。現に、それ以外の平日で無理して、獨りで学校へ行く準備をしたのが運の尽きだった。

玄関前で妹の月日ケイカに、

「え！？」もしかして、お兄ちゃん、学校とか行こうとか、してるので？」

そ！

僕個人、オツとイケね。昔は、土曜日も登校していたんだぜ、昔の人は……とは紡げない僕の内心小心「口は、次の言葉を口にした……」

「ああ、行こうとしていた所さ」

とは、言つたつもりはサラッさらない。けれど、どうやら、そんな事を口に走ってしまった様子だ。

「げげ、靴下たゞまつてゐるし、寝癖が悪か者に成つてゐるし、ちゃんと、身なりは、キチンとしないと、ダメだよ」

「ああ、悪い」

しじうがない表情を醸しだし、寝癖を治す妹

は～今日も学校か～ダルいな、とか思いつつ、実は今日は、学校に

行かなくても良いのだ。はは、妹よ、寝癖を直したところで、このあと、亞、しまった。今日は土曜日だ。とか言って、妹を翻弄させてやる。

「てか、今日土曜日じゃん、どう行くの?」

と妹

「はは、僕が学校にでも行くとでも思ったのか? そつと、学校に行いつとしたのわ。俺は悪くねー、俺の頭が悪いんだ!」

確かに、うそは言つていない。学校と名の付いた建築物での僕の社会的知能指数は、笑いを隠しきれない数値だ。

友達も指折りの数で收まり!

それでいて、友達と言える代物でもない人たちだ!

僕下僕!

その名が僕の真名に、等しい! いや、きっとそうだ。そうだったに違いない!

「あの大丈夫?」

ほら観る。僕をさげすんだ眼差しを、玄関前と名の知られた舞台上で、僕を禍々と神々しく見つめているではないか。

そろそろ、妹は、まるでこの世の者とは、思えない物を観るような眼で、『病院行つたら?』とか、ほざくんだぜ。あー、今なら、僕の家庭のリモコンの数字キーがどうして、ああ、にも、黄ばみやす

いのだろうと、普通鬱になっちゃう出来事も軽く『青春の汗がにじみ出でいるのをつて、威風堂々と清々と言葉で仄めかせるぜ。

「あれ？妹は？」

どうやら、観たまんまフリーズして、まねきんのように動かない僕を見て、どこかへ言ってしまったのである。…

「さて、どうするか…」

僕はまた一人、行くはずもない学校の制服を着飾つて、つったつて、居るばかりであつた…

カラクリ (前書き)

よつひそ、皆知る由もない白紙描写です。実を語りと、自分書いた作品は、一度観や読み直しあしません主義趣向で切り抜いています

カラクリ3

土曜日（綺）

どりあえず、何しようか…

一人孤独と虚登校を不登校したのだ。僕は立派な虚不登校児と化してしまったと実感する…

て、何をどこまで引っ張つてんだ？僕？

語彙が乱舞してるって、

僕白州川は、一人部屋を確保済みでいて、家の中に、存在するマイルームは、とても、心地が良く、開放的な一枚窓、それともなつて安らぎを奏でるカラス達。彼らは、電信柱に戯れ群れている

世の中は、とても巧妙に、出来ていて、とてもなく、斬新だ。

僕は、一人哲学的な事を考え続け、ついに見つけた、一つの答えを…

「暇だな～」

暇は哲学的の元素と言つべきであらう

「痛い」！

なんと、これは、驚くべき境遇だらうか…

強かなる物体が、顔面に強打したのだ…

誠に、痛い刺激が何ら普通の顔に走ったのだ。

「いてて、何だよ」

物理的痛みにこらえながら、墜落事故の物を確かめる…

「紙か…」

言葉の通り、紙が束に纏まつた物があり、それを人は、本と呼ぶ。

「独り言とか、しない主義なんだ」

と言いつつ、本を手手に持つ。

「…」

しつかり、目を凝らすともわかる。

それは、取り扱い説明書だ。しかも高圧的な厚みのある。重量感たつぶりの奴。

僕は目でじっと、凝視する。

ハジかしめの表情もしない本。

重力に従い。定量なまま本は微動だにしない。

じつと懲らしめ、疎く咎められるであつその視線を阿鼻に浴びせ。しかめる。

「よし、観山設定だ」

何かを心の内なる者に、項を刻む。

「今日は取り扱い説明書と遊んでやるよ」

「

カラクリ (後書き)

物事を考えるのがこんなにも、難しいなんて、思っても観なかつた
…人の世の理は誰が知るのだらうか…

カラクリ4（前書き）

語彙を乱舞させたい

カラクリ4

土曜日（祈）

ふは。翻弄して語らつてやるぜ

目次を默示録して、堪能に心も体も、愉快色に染めてやるぜ。

「ん？ 文字がかかれていっぞ」

それは、取り扱いの際のご注意だそうだ。

「なんだあ？、そりや、取り扱い説明書だからつて、取り扱い説明書の取り扱いの注意なしではやっていけないようにも見えて仕方なさげ…」

言葉数を並べる前に、回覧してみよう

そこには

当本では、もしもの事があつたための責任はとりません。当本を使用して、人に危害を与えるような所為は、止めて欲しいとご領取ください。当本は本当に本です。

「かい、見えるな」

納得のいかない。分厚さも領けそうな文字文字に見える。

「先ほどの激痛も大目に見てやるか…」

僕は、ちょっと前のこの本に対する憤りを赦すこととした。

「むー。」

手始めに、どりあえず、一ページ眼をめぐると、興味深く興を弾く一面がそこにはあった。

「真の理か…」

眩ぐ裸眼も一時停止。

一面には、「こんなことが記されていた

一、世界の建築の仕方。

二、世界の経路の伝達。

三、世界参考

「（ど）の宗教でもって、ここまで言い切れる善導方は観たことがない…するとここれは、新手の介入か…とか、言つちやつて」

僕は思った。こんな小回りの効かない文字を堂々と打てる輩に、正道な事柄はない…

とか思いつつ、馬鹿にもした物腰で数ページまくる。

「珍妙だ」

幾何学とは。算数の末端の象徴。

けれど、こんな使い方していいのだろうか…

眼にも疑うそれは、4ページ目のことだった…



「鍊成陣にしても、たちが悪い。完成度良いとして、弱酸性のセンスだ…」

何が伝えたいかといつと、小学生が如何にもノートの隅に書きそつとな『ザイン…』と云こたいのだ。

カラクリ4（後書き）

完成度はコツシヨシヨウシヨウ

カラクリ5（前書き）

「」で呼んでくれると助かります。後「」は白紙描写の貪欲な頬
みで、どうか、感想送ってください。

カラクリ5

土曜日（企）

何かの暗号なら、意味深なのだけれど、これは、どう観ても、落書きだらうなー

「と思つた。」

視界に「写り込む未確認円陣は。観なかつたことにした…

畳仕立ての床は肌触りがよく、半永久的に、うつむけや仰向けまで幅広く横になれそうだ。

えーと、そุดな、ノープランに勢いで書いた小説はここまで限界つて感じだな。ネタがない。

「お、好奇心をそそる」

『友達の作り方』

「今の僕には、サブキャラとヒロインとペットと悪役が必要不可欠
最優先事項だからな。この一部を読破つて観るか…」

18ページと家から十六行田に間氣間氣と記された『友達の作り方』を読むことにした僕…

お友達、これは、有限です。ちゃんと計画を立て、より良く効率よく扱いましょう

「うう、待つたまえ、堂々と有限って、言つちやんべれちやんで、良いのー?」

僕は、自分の良心を再確認した…

やっぱ僕は善人偽善者であるな、まだまだ、腐っていないぜ

「ふん、恥まわしい本だ。」

そつと、畳の上に置き
アグラを掛けていた状態 立つ
の状態に立て直し。

昨日の夜間に、残していたポテチを勉強机の引き出しから、引き出す。

ちなみに、物々しい教材はちゃんと、本棚に収納する性癖がある為、左右対称を意識しながら、本棚に収納している。

ちなみに、勉強机の表面は、埃まみれだ…

と、

ポテチを携えた僕は、先ほど、アグラをかけて、滯つておった定置に、着陸する。

「むふ、脂ぎった手腕で、忌まわしめの書（謎の取り扱い説明書）をギトギトにホフってやんよ」

軋む。開封済みノンフライポテトの袋…

「

カラクリ5（後書き）

いつか、馬鹿にされるまでの日まで諦められぬ、夢を追いかけ、かけ
続けたい…

カラクリ⑥（前書き）

朧気な夕日を塗り替えたい

カラクリ6

土曜日（岐）

健全たる僕の心当たる限り、初な悪行を、行つ志だ。

本を使用不可にまで、ギトギトにすんだぜ。紳士が観たら、どん引きどころじや～氣がすまね～だろつよ。

はは、善人たる僕の白紙に、今、新たな背徳邪道非道道程を小刻むことにして、なるであろう。進るであろう。

ふふ、僕は悪意よ。自分に向ける憎悪が天元突破しそうだ…脳みそ、沸騰して吹っ飛びそうだ。けけ、誰も、この部屋の王である、この僕を抑制させ、静止する動向は、出来ない！

だって、僕、友達いないもん。

「まずは、一枚…食らう」

ザリツ

觀手は、抜かりなく、手際よく、適度にポテチを食べに食べる

一枚…そして、一枚…さらには、一枚…あれ？ギトらない！？

「しぐじつた！…！」

そう、抜かりがでたのだ。綻びと底知れぬ、劣等感が上昇乗馬する。
僕の「メカミ」…

「前の5話で、ノンフライって、書いて合つたじゃないか…ビニ
まで引っ張つてんだ！僕は～！僕の馬鹿！」馬鹿阿呆

ドスドスと、畳仕立て床、に、叩きつけるばかりである。

ドスドス

ドスド

ドス

ド

：

時すでに、数分後。

余程、頭部を打ち付けていたのであらう。カツ「良く血がにじみ出
ている…

思だした…

そんな静まり返つた部屋で、人一人、沈黙に沈む…

あの頃

あの日は、いつだった、だろ？

僕を取り巻く。

楔瓦尾竿

くさびかわおさお

ひょっとしたら、奴がいたからこそ、今、健在するのかもしけぬな…

中学生

一番、バカみたいに弾け暴れる学だろ。小学生までの僕は、友達らしき人が居たのかもしれない。断定は出来ない。判断しかねない。そこまでしか覚えていない。

しかし、これだけは、どうしても確実だ。

中学生になつて、僕は再起不能の墮落、低劣愚劣、と落ちぶれてしまつたんだ…

「ジヨイナン！（遊ぼうー）」

楔瓦は、初対面々と僕を観て、開口一番、そう放つた。

最悪の選ばれし者誕生だ 僕

誰だつて、最初はギクシャクして、優しく気を使ってくれるモノだ。
楔瓦。

もしかしたら、親友かもしだ。

愚かな思想の獻上

邪険が選ばれし者を貪る

初めては、中学入学祝いに買って貰つた携帯電話だ。

薄型が評判だと、噂の造形の携電は、無惨にも、一台水に沈められた…

「気にすんなつて」

心なしか、無責任な言葉が飛び交う。

防水携帯に変えれば、ぱっくり、思わぬ方向に、画面が曲がり。
親に、反抗した。

「僕に携帯を押しつけんなー…どうせ、僕を束縛したいだけなんだろ
！！！嘲笑いやがつて、」

その日、意味もなく三日間学校を休んだ…

カラクリ6（後書き）

楔瓦が登場しました

カラクリー（前書き）

ポチる喜び

カラクリ7

土曜日（来）

と、

回想を繰り広げ、意識を現世に、舞い戻つてきた。
取扱中説明書は、転覆し、ハの字の強化版のようになつてゐる…

楔瓦のことは忘れるに越したことはないか…

取扱中説明書を拾い上げる観手

一見すれば、のび太の部屋にも見えるこの部屋は、明らかに片寄り
がたい配置で、扇風機とダンボールが積まれているだけの一人部屋
なのだ…

スペースは十分必要以上に、ありありだ。

なおも、言つのなら時間もスペースだらけ…

「友達か…」

もう一度、恥ましい本に目を通す。

生きていいく中で絶対的な生け贋、もしくは、下部部下として、使え
ます。

「言葉の適度を知らないなあ」

再確認しても、結果は巡回し本に代わりはないことになった。

どりあえず、公園に行く事が大事

「なるほど、公園から友達を厳選するのか…」

評価が一段階向上した。

「居いってみる価値は大いに、ありげ、だが、駄菓子歌詞、このようないい要素直な商人が進めるパンフレットのようなものに、書かれ出す、文字文字を信じて用のだろうか…」

迷うと、それこそ、この本の呪いに掛けられた様な気がするので、模範に実行に移す事に決めた…

カラクリー（後書き）

ポチる快感

カラクリ⑧（前書き）

次世代のシンポジウムを切り開くのは、険しき難儀な作業の積み重ねが最重要なのだよ

カラクリ8

土曜日（公園）

言葉一つでテロリスト。

よく聞く話だ。土曜日の公園は、色とりどりの色彩と選り取り見取り、手取り羽鳥と間取り吼え過ぎり犬犬と、子供達のカードゲームを、ベンチにパンチしながら眺めるのである。

配置に設置される高原色で単調な滑り台は、子供達に最適な高台へと、変貌している。

僕の牧場ってやつだる。

糞で素朴な様子に捉えれる僕。

いかがわしく観るのなら、一人寂しく子供達を眺めて、偏屈笑みを浮かべているようにしか見えない。

が、これは微笑んでいるのだ。

自己判断だけで収めるだけの話だ。

「コーヒー飲みたいな～」

「百五円か～」

この不況の時代、百円だけじゃあ。自販機でミニネラルウォーターー

つ買えやしない。

しょうがなく、仕方なさ芷原、近くのコンビニでも行く事にしてた…

時は、10時すぎ。最近のコンビニは、一十四時間営業していると言つかり、まか不思議。

「テクテク」

立ち歩きで、しかも、両手で例の本を睨みながら、駆け出す。

まず、女性のお友達を設定したいのなら、「この本を読み終わる」と…

そう上手く行くのか?

この文に、意味することを直訳するとしたら、よそ見歩行者を続けて、女性の女体に直接的攻撃するつて企てつて事なのだろうけど。明らかがましい…

元々、説得力の断片もない本の事なんて当てにしたって…

「わっ！」

「キヤー！」

“エリス、

キヤ？今、キヤつて言わなかつたか？
あり得なくないか？

そんな言葉生まれて初めて、自前の聞き取つぜ。

基本的貧弱な僕は、体重移動を謝つて、側転氣味に、大転倒する。

：

血！血がでる！

なんだか異常なほど。出血してゐよ。パパ、ママ！痛い！痛いよ。

とは、言へるはずもない…

「あなた、男の子の癖に、凄く情けない呻き声をうぶくのね」

でた！そんな事を言つてくる一人。絶対存在しないから…逮捕だ！
逮捕！

いつじて、その後、頭腹幾月と仲良くなつたのだ…

つむりねんべつき

カラクリ⑧（後書き）

頭と書いて、つむりと読む日本語がおかしい（笑笑）

カラクリー9（前書き）

いろいろと完成度が悪くすみません

カラクリ9

土曜日（麒麟）

頭腹は、実際の所、小学生の時から、ずっと、同じクラスだつたらしい。

「気づく方がおかしいだろ。おれ、女の子とお喋りしたことや遊んだり、したことないし、それに、顔すらひぐに直視したことなんかないんだぜ。」

いつも、お外にでるときは、いつだって、長ズボンな僕は、今回ばかりは、長ズボンの有能所為に再度、諭された。

出血は、長ズボンのおかげで、小規模な被害で收拾した。

膝がぱつくりピザのように、血まみれ破れているが、問題なく大丈夫だ。

なぜだか知らぬが、頭原はそんなの大丈夫、大常備してあると、言わんばかりに、包帯を懐から取り出し、応急処置をほどこしたのだ。

「そんな、施さなくても良かつたのに…」

情けない声を出すのは、僕の方で。

心なしか、こんな事になるとは、夢でしか見たことないと、殆どの人が思っているであろう。

するとだ。頭腹という、謝つて頭原と誤変換したり、とうふくとか呼んだりしそうな頭腹が。

「さつき、落とした秘伝文書を勝手に、拝見して観ただけ…見解するなら、実に興味深かつたわ」

「な、何だよ。その、お、おかしな、おかしなモノを見物するよつな、まな、眼差しは！」

自分でも、目が泳いでいるのが予測できた。

いつもながら、ベンチに座っているのだが今日はなんだか落ち着かない。

ちよつと、さつき、一度ぶつかった彼女と、缶コーヒーを買って、公園内に無造作設置された僕専用ベンチ向かう途中に、また、ばつたり、会ってしまったのだから、定めどばかりに。

一人で腰掛ける形になってしまったのだ。

説明の仕方もがちがちだ…

「当たり前なことを、言つのですね。あなたは、変な人で決まりじやない」

当たり前のよつて、言つのが恐ろしい…

「と、どりあえず、本を渡しに来ててくれたことだけは、助かったよ。…そ、そう言えれば、頭腹さんは、何か用事でもあったんじゃないの？有るのなら、それを優先すべきだ。」

どりあえず、きこひないこの空氣は、僕の性と柄に合わない。それに、つなげて言うのなら、この取扱中説明書は、デスノウト並みの力があるのはたしかと判断した。

「無理ね。だって、幼なじみだもん」

と頭腹が言つ

カラクリ⑨（後書き）

読み直し等はあまりしない主義なので、仕方ないです

カラクリー10（前書き）

勢いで書いた

カラクリ10

土曜日（旗）

善人にのイメージ容姿を持たい。ちょっとした願いだ。

それを偽善と言うのなら、偽悪だつて、有つても良いじゃないか。

自己集中心的人格がいれば、他志願誘導系人格も居ても良いじゃないか。

「ん? 何か、言葉おかしい点がなかつたか?」

もう一度、言ひ直さんよ。

「正直に正確に言つと、幼なじみらしい関係になりたいの…」

おつと、つっこみみたい点がいくつか有るよ→これは突つ込むべきなのか?

「関係? んな、馬鹿な話があるかよ、目を覚ませ、ここは現実だ。他次元とは違うぞ、弁えろ。」

「こは面と向かつて、相手の思惑や企てをさらけ出さなくては…そつあつさり、信じられない偽善者なのだ。

「また、おかしな事を言つのね。こは一次元よ」

断定できるのか?!

いやいや、僕が一度目の相対の体当たりをしたシーンでの携えてい

た缶コーヒーが若干、Tシャツに付着している方がもつと涼になる。

「もつと、的確に正確に言つのなら…

文字よ。」

言つちやつたよ、この人！

確かに、頷けんどばかりに僕たちは、一進数でも、存在して行けやうな。文字文字だ。断定工程の沙汰ではない。

「現に、今までのあなたは、トリガーが作動していたの。

… その、全ての理と言つべき物がこの忌まわしめの書、略称（忌書）いしょ、よ、ネタバレね

ネタバレ？

あ。なるほど、普通この本は、現段階で知るべき、モノではないと、言いたいのだな。

「証拠は？」

「ない」

えつ、即言即答？

「無いの？」

「ないです」

ベンチが軋む。お空は青真っ盛り。

「信じるか、信じないかは、あなた次第って事?」

「前提を肯定するわ」

ヒロインは、凄まじい日本言語を言い出すな。
けど、けども、僕はこんな毎日が変わればいいのに、とか思った時
点で。こっち側だったのか。

本来否定すべ事が否定できない比定すら出来ない。

あー、まどろっこしい。マジで、生きてるって感じだ。

「ちょっと、だけ、頭をベンチに打ちつけて良い?」

バカな発言だ。

カラクリー（後書き）

誤字が多いかもしれないし、文法もおかしいかもしれないが仕方ないですね

カラクリー11（前書き）

可笑しいな所が有つたら、申しわかない

カラクリ11

土曜日（毅）

「うん、良いわよ」

律儀に、少しせこ側に寄つて、頭部を打ちつけ易くするための空間を作つたのだ。

「じゃあ、遠慮なく」

てつ、いつの間にか、気軽に言つたはずの言動が進行しあがてるよ、ま、いいか…

ひとまず、打ちつけめり」とこ、自負を取れり」とこしよつ

めいいつぱい、ベンチの硬質で鋭利な所に、頭蓋骨の前頭野に当たるところを打ちつけめり…

ガンガン

がんがん…

「頭をベンチに打ちつける、意味が分からぬわ。」

ガンガン、

「はは、知らねーのかよ、（ガンガン）
肯、すつとな、▼が上昇すんだよ。（ドカドカ）」

自分でも、羞恥心が際立つて、来るぜ。周りを済ませば、子供達が
いびつ目線を送信を信仰する

「よく意味が分からぬに、越したことがないわ」

紙パックのミルクティーを両手で包むように保ち、飲むのだ。
こいつ、髪の毛長いくせに、紙パックの持ち方が危ういな。

「はー、良い感じがする、てか、ハイになつたぜ…」

額は血まみれ塗れ、ガクツと、ベンチにもたれかかり、両手手腕を
後方へ放り出す。

「ただの変体ね…変質者と言つべきかしら…」

それにしても、ミルクティーを飲み干すのが、遅いなこの人、いつ
そ、僕が飲むのを手伝つてあげようかと、迷う所だな。

「どうせ、男性なんて、変人ばっかだ、僕のお父さん一人を観たら、
ドン引きどころか、天涯に生きたくなつて、他界したくなるぜ。」

言つている通りだ。まかり通すなら、世間の風上にも、置けないし、
親としての傍らにも、設けられない。

「大変なのね…」

大変なのは、みんな一緒さ、とは、口が裂けても言えない。断定は

出来んが…

「あれ？ いま、 大変と変体をかけた？」

疑問符で攻撃する。

「「」のミルクティー。味が濃いわ…」

無効化された。

とかなんとかで、正午に差し掛かろうとしている時間帯だ。子供達は「」つ然と姿を消し始めた。

ん？

「話を戻すけど。頭腹は、ずっと、同じクラス立ったんだっけ？」

なんか、可笑しい引っかかる。今日この日、単純に今日初めて会つた。

としか、思えない。

なぜなら、学校で、よりによつて、同じクラスで見かけたことも、聞いたこともない感じだ。

あやふやで朦朧な記憶力を前提とした、仮説だが、

「そんな物よ…」

そななもの？

「意識していなければ、空氣と回じつて事、

…

私があなたに言える言葉はそれだけ…」

取扱中説明書の49ページ

この世は、ゲーム

皆さんは、プレイヤーでただの駒です。プレイヤーで駒と言う立場を上手く利用して、上質で完成度の高いドラマを演出してください。消滅しても再度、プレイしたとき、初期設定が有効になる事もあります。

カラクリー11（後書き）

イかれた場面があつて、申しわかない

カラクリー2（前書き）

クレイジーきわあまりない

カラクリ12

土曜日（櫻）

嫌いな事が得意になることって、あるよね。

私にとって、あいつは関係ない人材でした。名前は知つていも、好めない感じでした。まるで、ただ機能している歯車、でもなく、本当に意味がアルの分からぬネジ。私の視界には、映写していなかつた。あいつには、友達がないの？ あはは、愚かで哀れね…と、思想に抱く私も立場を弁えていなかつた。私も知り合いは居ても、友達だと思われても、私個人は、まるで、お友達だった。そうだわ、名前を覚えているって事はただ事ではないじゃない？ そうよ。そうね。運命ね。

⋮

「おい、頭腹！ すごい児童がいるぞ」

額に血痕が付着しているのは、ハイ有る印の僕観手だ。

「一見外見年齢、12歳ね。恐らく小学生。」

公園の砂浜に、何やら、何やら、何々か、切磋巧みに、樹木の棒を走らせているのが伺える。どうやら、小学生が算数をしているらしい。

隣では、もはや、チンパンジーと化した、興奮状態全開の観手。

「遊んできたら？」

「ふん、下らぬ。小学生と戯れるなんぞ、あり得ぬな。」

膝がぱつくり開いた長ズボンのポッケに、手を挿入して、歩き出す。

「だが、あれは…異常だ」

カラクリー2（後書き）

等間隔に

土曜日（棄）

兎も角、ぎじちなく整わない足取りで、およそ、小学生とも見える子供の元へ、より、付近に一時的、留まることにした、理由は行動を把握するためである…

するとたゞ。今日に映る子供は、すらりすら擬音を使って、方程式を解き続けるではないか。

僕、観手は驚きを晒し退く事も出来ずに、珍しい素顔を浮かべてしまつたのだ。

「兄さん、異様な表情をしていますよ？それも、僕を誘拐しそうな物腰で…」

その言葉に、慌てて我に戻る僕、観手は似を表すなら日本妖怪塗り壁のような、結構滑稽体制をかたどっていた。

吟味する、このお子さんをどうとか、落ち着かせる為、額の血を拭つて…

「失礼、これは妖艶な姿勢を見せてしまった、ところで君は一体、何を刻んで記して道楽つてるの？」

語尾が軟弱だか。我ながらに、良い言葉遣いで日本言語も完璧だ。

「観手も分からぬのですか？アナタは、怖いほど。頭が疎いです

ね。笑っちゃいます

「、この子供、腹立たしいしく、疎ましい。
決めた。こいつは、童貞ちゃんだ。

我ながら、小学生学生のあだ名とは、思つまい。うへへ、最低で底
辺地味だ。険悪も買って出る最高の真名だ。

「おい、童…」

またもや、今回一度目の目を誤った。

彼の描く方程式の中に、『それ』が入っていた。

「一体、どういう事合いだ？！」

そこには、

○

絵字通り、床かで観たことのある記号化伝承線だ

「床窓 碇です」

膝をはたいて、立ち上がる。

カラクリー3（後書き）

ゴシゴシ

カラクリ14

土曜日（伎）

「ちょっと待つて、」

声が裏返り、似つかすなら、シャープな蜥蜴の鳴き声の相対的キーで申してしまった。

「？」

優しく児童をどけて、かがんで片膝つかして、砂浜砂漠の模様、すなわち、幾何学的魔法陣を凝視した。

「全く持つて、神妙だ…」

別に言葉を選んだわけではない。ただただ、考えよりも視覚的理解も、まかり通り差し置いて、その言葉が口からフライングした、しました。

「?なにがそんなに、可笑しいのですか?もしかして、順応に適応して、『あなたは天才です。』とか、言ってくれたりするんですか?、言ってくれると、うれしいなー」

この子供、かなり自信過剰だな。逆にほめ殺したくなったり、ならなかつたりするな。
僕の率直な感想だ。

「あなたは天才よ。」

と、床窓と言つ少年の背後に、丸みがかつた影がそびえる。チクイチ答えを耕すコトはしなくてよろしいのだが。頭腹だ。

非違する事なく、彼女は坊やの肩に女性らしい手を添え乗せる。

「天才なんて居ませんよ。天災しか起きません。」

なんて、聞き取るに、青息吐息しそうな語源を扱うのだろう。と、僕は考え思つた。

「算数だけではなく、お葉葉までお上手なのね……」

考えるに値しない、いさとか些細な開口にて、票を称えるのは、頭腹の方だ。

「所で何を自主学習なさつていたの?書き記されたのは、数字の様だから憶測で推測に過ぎないのだけれど。」

数分間に錯覚してしまつ。数秒間の間が瞬く。

「落書きね」

逡巡と駆けめぐるのは、追い風の方だった。

カラクリ15

土曜日（畿）

「見え透いた茶番ね」

茶番を連想させる語句は、お茶会や茶道である。

「僕ですか。そうかもしだれない。そうであつて欲しかつた。などと、言いたい。」「考え寄りも、現実の方が異常で異質で忌まわしいですよ。」「落書きですよ。観ての通り」「なんの変哲もなく、変異、変性もない、無邪気なアート」「と、言いたい、でも、これは何か、肯定する何か、の理論、でいて、なにかを証明しているのです」かなり、荒唐無稽で「テタラメな言い草に聞こえるが、床窓少年が言うと、それはそれは、意味ありげな物言いに聞こえてしうがない。

「長々と口動かしていたけれど、一言言つて、床窓少年は、單なる掛け算ファイターって、所なのね。驚きだわ」

天才算数少年 床窓

昔の僕は、余りにも天才過ぎて仕方なかつた。友達は0、幾たび、その才ある僕が知らぬ間に、蹴散らしていたからである。
言葉は好きではない。

答えが出せないからだ。

言葉も答えに出せる方法は、知つていた。簡単で居て単調な方法だ。つまり、要するに、要になる『数字』を基点にすればいいのだ。ひと語句、ひと語句を数値に換え、後は、計算するだけなのだから…

違った。

誤ったのだ。

それに気づいた僕、もう手遅れだつた。
親も殆ど、僕に対して、構わなくなり、生活最低限の事しかしない。

目を観れば分かる、虚ろだ。

何処までも深く水深500000メートルは有りそうだ。

洗脳や催眠術と同じ、言葉は気持ち？

言葉を数値に換えてしまえば、気持ちも数値化でき、人も機械的な
対応しかしなくなる。

これは、ただの仮説だ。

カラクリ16

土曜日（稀）

あらすじ

ふと氣づくと、よく理解できない。話の流れになつていてるので、虎視眈々と、軽く説明しようと思つ。

まずははじめに、主人公　觀手が一冊の本を読む。

その本に書かれている。物に興味を抱く。
操られるよつにして、公園へと向かい。

そこで、運命的な出会いをしる。

幾月だ。

その後、公園のベンチに頭を打ちつける主人公。

お昼も近づき、子供らが家に帰る中。

一人、砂浜で留まっている子供がいるではないか。

子供と言ひよつたり少年だ。

なんだか、陰気な雰囲気を晒し醸し出している彼に、

僕は思い切つて、近づき、話す。

少年からは、とんでもない事を口づさむばかり、

そこへ、幾月。

そこから先は、少年のエピソードが展開されたのだ。

かと言って、僕は呆然と棒立ちしているだけである。

「所で、床窓、僕と友達にならないか？」

「え？」

何となく分かる、僕だってそうだったように、少年もまた。神様が差し尽かした歯車を彼に提供したんだ。

一人、孤独の気持ちは痛みさえも生ぬるく感じてしまうほど。分か

る。

恐らく、そうなんだ。やつと分かつた。

ここにいる。彼ら。

詳しきは、床窓 碇や頭腹 幾月は、ずっと、一人だったんだ。

今ならばかる、今現在、登場している彼らは、寂しい生き方をしていたんだと。

「君もだ。幾月。」

下の名前を呼び捨てでもって構わないだろ？

「止めて、くれないかしら？」

「拒否する」

微々に、鳥游がましい顔をしたが観なかつたことすれば丸く收まる。

僕、觀手は、

「そして、少年。お前は、カタカナでイカリだ」

命令を差し伸べる。

最後に、僕は決めた。

「上手くいっている奴らに、一泡ふかそりぜ」

それから始まる。

僕らの地獄路。

常識に立ち向かう。新たな物語

軽くラリる

カラクラリつてな。

カラクリ17

土曜日（祁）

平民で凡人な平凡な毎日が終わりを告げた。

告げるという。表現技法が狂っているな。用は、宣言したのだ。

「さて、ここから何をし始めよつか。」

静寂と混沌に包まれた、沈黙を自ら打破した僕、観手。

「何を始めようかって、観手さんは、本格的に計画を立てて、発言するお人ではないのですか？…がっくりです」

物静かな表情を絶やすことのない。自称算数得意少年は、僕観手の『常識に立ち向かう』的な宣言を心待ちかに期待していたが、ノープランな事にがっくりした様子だ。

見て取れる。

「その中には、私も入っているの？」

意外と冷酷な視線を送るのは、先ほど、顔と名前を知った幾戸と名乗る小娘だ。

「無論勿論、入会済みだ」

正午は、とっくに過ぎている。そろそろ腹の虫が悲鳴と奇声に分けて、泣き出すであろう。

ま、そんな事はないと思ひなご。

「仕方ないわね」

「おつと、あつれつと同意してくれるのかよ、驚きだ。」

「所で、觀手さん。僕は結構頭が利口からずつときます。もしも、万が一、僕らのその非道な同好会で間違いが起きても、全部、あなたが責任を取つてくれますか？」

少年イカリは、この会で何かが起つてしまつたご様子だ。

「心配なごや。」

即答と決意をはらんでそう告げる。

「その自信はどうから、訪れるのですか？」

想定範囲といつうか。繰り出せられる言葉を先読みしていたといつうか。その答えは、もう決まつてこる。

「この恋まわしへ敏感い説明書だ」

自分でも、その本をどこからしたか分からない、けれど、演出にまつてここでの、早出しだ。

カラクリー8

土曜日（汽）

「やめろ。幾月！ファンシーなステッカーをこの取引扱われる失明書に、張るんじゃない！」

取り出した。辞書よりも厚みがありそうな重本をほんのり観てみると、

なんとも愛らしい動く動物のステッカー達達がまんべんなく、抜かりなく、張られているのである。

「私ね。実は、読心術とか、出来たりするの、でね。あなたの性癖似合わせて、張つてみたつてわけ」

くそ！この娘！髪の毛長いくせに、僕のひよつとした趣味の傾き加減まで、把握してある。

部屋中動物の国でも栄えるのかつてほど、アニマルシールを思つ存分、腐るほど、張り詰めていることは、絶対に、隠し通し、墓まで持つて行かなくてはならない義務があるのでに対し、早くも感づかれているじ様子だぜ：

冷や汗をのみ、生つばを垂らす。

「君は、あり得ないと口にするな。笑っちゃうよ（アハはははははははははははははは）」

わざわざなく、あや怪しい行動。

間違えると命に関わる。

「あ、あの～、幾月さんでしたっけ？」

だっけ？じゃね～よむちゃんと覚えとこ！

これだから小学生は、記憶力に驚く抜かるから小学生は。

と僕觀手は、思った。

「？」

首から下の全身を固定したまま、首をひねり、イカリを直視する。

そつだ！その調子だ！話を逸らせ！イカリ！

「僕が描く式には、何らかの意味があり、それ自体を人が予言と、高く評価していたけど、幾月さんが言つ。『落書き』つてのは、ちよつとい、げせないのですよ」

自己調整しろ！と言つのは、よく耳にたかができる話で、彼もまた、限度を知らない唯我独尊主義者らしいな。

小学生の癖に、生意氣だ。

と、思わせる僕

「私に訂正を求めるの？」

「

言わんじやない。

彼女ちよつと起こしてゐるぜ。ウゲへ。僕は、通りすがりの傍観者さ。
括弧が滑稽な光景になつてゐる。

と、無言の僕。

「素直にいったら、縦に領きます」

「それは素直に言つてないと、思いますが?..」

「何だよ。この展開。バトルでもおっぱじめようか。とか言い出しあうだな。

「だつて僕。天才なんだもん。」

ぐは。

「なんなら、私は、觀手さんが大好きです」

お、おい、まて!

狂つてゐるって、お前ら!

「そこまで言いますかで、なら。觀手さんは、使える下部と愛、ど
つち取るか。

バトルでもおっぱじめようぢやないですか!」

おかしなおかしな物語り…

「良いところよ。黙むわ。」

次回

こんな僕でも
ついてくる人
いるのかよ。

カラクリ19

土曜日（汽）

大好き？今大好きと言つたか？は、微笑ましく愛くるしいな。そんな弱酸性で居て、万弱な音は生まれて初めて初体験だ。

まあ良しとするか。好意の行為は受けとくべきだ、この場合は、発言か…

視線右 左へ

なるほど、下部か…使えるな。

手下として、骨の髓まで下部に食べ食べしてやる。

はは、まるで、

使いたい駒が手元に上等万端とそろつてゐるようだぜ

「別に勘違いしないで欲しいわ。私は、この少年を天才児と認めるくらいなら、好意の矛先をあなたに向けるつて、言つだけの話なのよ」

理解にもがき苦しみたくなる言葉数だ。

「容易に勘違いしないでください。僕は、あなたの下部になることを望んでるわけでは、ないのですよ。ただ、気まぐれで…」

と少年イカリ

「わかった。わかったって、とりあえず、話を進めよう。勿論、誰を選ぶなんかはしない。できるだけ、平等に均衡はかるのを前提として、優劣を決めたり、能力的差額を差別らないから。」

と説得。

「ヤリまで、口走るのなら、忘れたことにするわ」

「僕も、同じ決議で」

あつせりと、言いやがる、此奴等、なんとく、語源戦争したかっただけじゃねーかよ！

「と、脱線事故と、話が歪みまくったけど、第一言に、僕らの組織的、名前が必要なんだ！いや、重要」

「自分で言つて、恥ずかしくない？」

「」もっともですね

僕觀手は、浅はかな知恵と知識しか所有していないのだ。

次回

躊躇朦朧会

カラクリ20

土曜日（季）

皆さんは『氣づいてない』あるいは『氣にとめる』よつて事はしていないであらう。

の土曜日の後に続く、丸みのある括弧の一文字を…
前の話と、その前の話がかぶつて、いたのだと、皆さんは知らない
であるが、
今氣づいたであらう。

そう、作者自身が変え忘れていたから、皆さんは分からなはず、
と解釈拝見して欲しい。

「躊躇朦朧会でどうだい？」

ひとつせとつせ、ふと、脳内をよぎる語句を紡いだ新熟語だ。

「ひじ一ひ、書ひのなら、ふと、思いつくモノは何らかの意味が存
在し、有る意味、意味の有る事柄なのだよ。

無意識な意図、あるいは、もしかしたら、誰だつて、予言者なのが
もしれない。

「漢字すると、拙劣で…。センスが事足りてないわ。」

「ちゅうひょうもひつひつて、じゅうじとも、半端ではないですか。」
レだから日本言語は難しくてかなわぬ。」

小学生まで、けなされるとは。僕も捨てたもんじゃない。

「！」ほん。

声帯の調整

場の間合い

体勢静態

「つまり、要するに、多分おそれく何となく、大抵大概、は、コレ
で決まりだ」

「はい？」

応答したのは、イカリの方で、幾戸さんは無関心だ。

「だから、僕がいいたいのは、ほかでもなく、この会名義で決まり
つてこと」

優しくお手柔らかに、話す。

「あ、そっちですか

ん？」

小学生は、的外れな答案を繰り出す。

「イカリ君、確認取らせて、お前は何が聞きたかった?のかい?」

一応念のため万が一にだ。

「活動内容が気になるわ」

おつと、今度は、こっちからかよ。
思わせぶりのふりは達人だな。

「全地球上に、揺さぶりをかけましょーってのは、どうです?」

名人か、こいつらのリリースアンドパス回しは、

「規模が盛大だな。却下を下ろすしかな…」「いいんじゃない(肯定の意)」「いな」

この一人、もはや、キヨウダイ的な繋がりが、絶対あるだろ。
僕觀手はついて、いけません。

こつじて、お腹は空く…

ー

カラクリ21

土曜日（鱈）

特定の人間は、好き勝手やつて、来たから、もう、何が起きても文句は言えないだろ。

「もう、腹が減ったから、帰る」

告げ口を叩いて、帰ることにした、だって、お腹がペコペコ何ですよ。

「待つて、ください。観手さん。次の集会の連絡の共有のために、メールアドレスを「ピーして交換しましょう。」

言つまでもなく、イカリの助言。

だがしかし、その言葉につむと頷けるハズがない。

「悪い。携帯電話持つてないんだ。」

との理由があるからだ。

言い終わって、ふと、気づく。

「ん？小学生のくせに、携帯電話なんか、所持しているのかよ？」

客観的に観ても、俄に信じがたい。小学生がポチる機器を常時所持している。「このイカリという少年が、

「えー？ 高校生で携帯を持つていなければ可笑しいのではないのですか？」

「ひつでも良こけど、やつせから立ち話して、足がしびれるぜ。」

「馬鹿をいつなよ。いつかじまいつの理由があつて、…まへんだ。よくある話だ。」

5度携帯電話をぶつ壊されて、もつ、自分から必要ありませんと、家族に、抗議したことなど、最も、よく言われる口が裂けても言へない、だ。

詮索心が沸くから、ガキは嫌いなんだ。
とでも、いつべきか…

余計だな。

「やつですか、なら、毎日、公園に滞在しておきますので、いつでも来てください。」

滞在の意味をこの子は、果たして、知っているのであらうか…

「幾月さんは、じつします？」

イカリが訪ね問い合わせている。

正直な所、幾月がこんな、馬鹿っぽい集会につき合つような面持ち柄ではない事ぐらいは察している、けれど、この会から今までの出来合いで、どうして、居続けているのかは、僕には理解ができない。

ちょっとせりあ、ロザさんでていた。証言は好意ではなく、厚意であつたはずだ。

「私は、…、そうね、暇なときに、イカリの方から、電話かメールを送つてくれたら、相応対処するわ。」

と、受信送信たぐいのやり取りを行う。イカリと幾円さん。僕が思うに、幾月がイカリと呼ぶ声は、なんとほのめかそつか、違和感か音程のトーンか、何かが違うような気がする。

「登録完了です。」

「では、お開きという形で、さよならです。観手さん」

興も冷め、帰宅路を踏みしめ始めていた僕に、さよならといひ一寧に、伝えるイカリ。

「律儀な奴だな。話された分、こっちも言葉を返すぜ。…イカリと幾円さん。お世話ですがさようなら。」

顔は半觀の状態だ。無論、足は痺れ、がくがくでいで、決まらないが、手の甲を軽く上げ、搖する。

次回の話をするのなら、顔も忘れたあいつが現れる。

カラクリ22

土曜日（帰）

言つまでもなく、文字通り帰り道だった。

民間公園と言つても、それほど大規模でなく、公園と表現するより、空き地と言つた方が過言ではないであろう。

帰宅と罵る単語は、僕からしてみれば、一段階下層の単語にしか聞こえない。匹敵しよう言語道断を口にするのならハイパー帰宅とも言つた方が良いであろう。

歩くのが好きなのか、それとも、家に蛙のが好きなのか、イマイチよく理解していない。

恐らく、両方有る。

ふつう気ままに、歩くのと、自転車や自動車などで、帰ることでは、両者ともつまらない。と、断言する。

帰り道と言つ名の舞台で、徒步で歩くと言つ演技をするのだ。周りに見える、景色は演出を増大させ。

とっても素敵だ。

⋮

⋮

⋮

はて?、前方に人影が見えるが。

一体、誰だろう?

時は昼過ぎ、若干住居に囲まれた、道筋に、人がいる、歩いて来る。どこかで観たこと、有りそうでなさそうで、頭の中が淀めく、前方不注意で衝突しないように最新でいて細心の注意を払う。

だがしかし、想像したであるう、その結果を大いに覆された。

外見からして、同じ年か、それ以上な彼は、通り過ぎ、何処かへ消えてしまつのであるうと覺悟していた僕を翻した。

すれ違つて、僕の知らない遠い遠い遙か彼方へ過ぎ去つてしまつてあらうと覺悟した僕を嘲笑うかのように、立ちふさぐ。

対局する僕合わせて一人は、沈着と冷静だ。

明らかに、彼の顔色はおかしい。

逡巡とためらう僕。

声を掛けるべきなのか、シカトして無視るべきなのか、選択に困る。

躊躇朦朧としている僕は、はたから見れば、拳動不審な変なお人にまれてしまう、

それだけは免れたいが、額にカツ「良く怪我をしている時点で、疑問に問われる。

確信はないが、まず、膝がピザだ。

ジュクジュクしている。

いや、大丈夫だ。しつかり包帯をしている。

言葉を並べれば、並べるほどワイルドな容姿だな。

数分は経過したか、もつ、右往左往するの止めよう。

「ここにまづけ

顔色が体調不良な彼に、一言掛ける。

：

：

「俺の事、知っているか？」

と返ってきた。

俺？

何かが引っかかるような。小首を傾げるそぶりをする。

「ここでまひは

試して、もう一度挨拶、

「知らないのかよ。俺だよ、俺」

「こちにま

「ま、いいか、…久しぶりだな。觀手、今回ばかりはどうにもならなかつた、謝罪しても許されるはずはないよな。だって、結構、悪行をお前に擦り付けていたんだから、良いんだよだって、お前のためにやつてきたことだから、自己犠牲も良いところだ。なんだつたら、俺の代わりに、かわつてもいいんじやないか。立場を。」
「…」

それは、

「よしならだ」

僕の視界が、無に変わったのは、言い終えた直後だった。

「

カラクリ23（終）

闇がほとばしる。

何もかもが無だ。

逆に言えれば暇だ。

ここでも昔話をしよう。

昔にこんな奴がいた。

ある友達の家に遊びに行くことになった。
その友達は変わった趣味をお持ちだった。
お菓子の箱を収集する趣味だ。

僕は、疑問に思い訪ねた。

…訪ねるが如し、次のような語呂を放つ…

本当は紙切れだけど、好きな物は何事にも代え難い。

正直泣いた。

あまりにも美しすぎて、余りにも、純粹で無垢なその人事に、感動した。

その名言とも言える、超絶言語は、僕の心の蟠つていていたい何かを、

なんつーか。溶かすような感じに、浄化したのだ。

今なら、しつくづく、思い出せる。あれは、楔瓦だ。

ずっと、僕の友達は楔瓦立つたんだ。

ああ、もう一度やり直したい。

でも、手遅れ、手の施しようがない。

完全に、僕の負けだ。

■ ■ ■ ■ ■

ハンドルーザ

空力ラクリ

田羅日

「すまない。なんて言っていたかを、聞き取れなかつたわ」

「だからですね。観手さんが消えたんですよ、物質から根っこで」

「困つたことに、なりましたわ」

もちろん、ミルクティーは欠かさない。

「何が彼を襲つたのでしょうか？」

公園には、誰もいない。彼らを除いては、「ま、そのうち、帰つてくるでしょうよ、気長に待ちましょ」

空は、青。透き通る空と、澄んだ空気が風に乗る。

常識との戦いは、始まつたばかりだ。早々に、問題外な事が起きうるのも想定内だ。

彼、彼は、観手だ。観手の血痕が滴るベンチ。乾いているが確かに、彼はここにいた。私達も一日だけの出会いだったが。

よく覚えている。

空力ラクラリ2

草原

少女が立っていた、年はイカリくらいであろう。

小学生くらいの女の子、別にやましい意味はない。だつてそこそこ視界に映る草原には、彼女しかいのだから、嫌でも願つたり、思つたりするのだ…

「こゝな、どこへと…

八方、どこ観ても、草原が広がり、太陽がないのに、青い空と穏やかで優しい風が吹き渡る…それだけの空間だ。

今更ながら、状況把握をしていないわけではない。こここな、何もなく。前方に立ち尽くす彼女だけが頼りだと、誰もが思つであろう。

「うへへ

腹の音だ。口には、していない。

「あのー、そこのお嬢さん?」

無駄な物は一切着飾つてない。ワンピース姿だ。

「何だ?」

と少女。なんだはこっちだ。

幻滅させられる口調は、言葉通り幻滅させるれた。

返す言葉を選ぶ僕。

「初めに、言わせて、定番過ぎるけど、生まれ始めて、口にするんだ。」

「だから、どうした？」

僕、少女と続き、言葉を紡ぐ。

「『』は、どこですか？」

僕は、アハハと頭の渦に、手を添える。

「観ての通りだ。それしか言えん。」

少女。何だろうか、意外性が有つてしまへんと言つよつ、もうなれているキャラつて感じだ。

あ、そうか。イカリと同類の匂いがするからか。全く、最近の小学生は頭が良すぎて、対応に困る。それと比例して、眼のやり場には困らないが…

無邪氣で人なつこい方が退くからな。対人恐怖症と言つのであるつ。

「少しばかり若干ちょっと、ぶれた言葉を言つけど、『』は、時空の狭間？それとも、元凶世界？」

「もつともな、質問であろう。現に、もう現実味の無い現状が降りかかるつているからな。

「どちら共でもない。…けど、お前の事は、知つている。」

知つていてる? 可笑しく笑えない発言だ。良い用にとれば、話が迅速で助かる…と、険悪にとらえれば、ジニからどこまで一部始終まるまる全部知られている用な冷や汗級のプライバシー剥奪疑惑…が述べられる。

「僕、携帯持つてないんだ。」
「携帯とか繫がる?」

バカな発言だ。つい、険悪感を整えるべくの口車にしても、馬鹿すぎる。

「繫がる。よ」

よ? 繫がるのか、

「何がどういって、どうやって繫がるの? そこんどいふ、詳しく述べたいな」

「馬鹿かお前は、分かるはずが無いだろ!」

無意識にその言葉を聞きたかつたのか、ホットした。

空力ラクラリ3

草原

人類の最後を僕は今から予言しようか：

人類はタイムマシーンを開発する前に自滅する以上

次元を渡す前に、どつかの誰かが、原子爆弾の10000000000000000000000兆倍の爆発物に着火を押し進めるであらう。その時が最後だ。

「何を馬鹿を押し進めているのだ？観手」

かんしゅとも言えそうな僕の名前を言い当てるとは、じじつは、本物だ。

「しかし、何処まで歩けばいいんだよ？お嬢さん」

まだ、名前さえも聞いていないことから、僕は一方的彼女にある程度情報を知られている、木偶の坊らしい。

足が力尽くなつてきた。

「じじは、原始の茂み原だ。何処までの何処とする地点は、固定印が存在しない。」

ん、なんつった？聞き取れなかつたんじやなくて、日本言語をまず言つていたか？

「日本語で話せ」

と言つてみる、

「……何も無いではないか。」

正論だ。目的地もなく途方に、右足左足を交互に動かす連続技しか出来ない。

「どれ、飛んで観ろ。」

案を奏す。

「飛ぶ？だと

「飛脚の距離を計りたい。置くまでコレは、何となくだ。裏腹はな
い」

暇だからだ。意味は無い

「お前は、私に何を求めているのだ？」

「脚力測定」

僕は、お前の事知らない分、身体能力位は代償として、知つていきたいの案だ。

「そつかなるほど、私をなめていふと言つのか。ふむ。分かつた。
飛ぶぞ」

飛び飛べ、所詮小学生の飛距離なんて、1メートルが精一杯だらうよ。

「おつや」

「ほー凄い。三メートルはない飛んだな。助走込みで」

両手を使って拍手。これは見事だ。

「次はお前だ。飛んで観ろ」

見事に選手交代を図る。

「あーすまない。おれ、額から出血したんで、貧血気味なんだ」

確認のため、額に手をやるがあら不思議と綺麗に完治しているではないか。おまけに膝がピザついていた膝もズボン」と、修正済みだ。

故障してるんで、「遠慮願いだい。の言い訳は、虚しく、効果を著しくしてしまつこの世界のルールを思い知った。

「パン食つてないから無理」

換え揃んで、一皿田を皿へ。

「パン食べとけよ」

?、つまつ、今の理由は、通るのか?いや、通つたのか。

「ピザパン持つていいか? おれ、腹がペコペコなんだ、持つてい
るのなら、飛んでやらないこともないが……」

思い出せば、楔瓦に合った時には、極限状態の空腹感に満たされて
いたことを想えれば、それほど、腹は減っていない感じだ。

「無いことは無いが、空氣味の無色透明質量ゼロのアンパンマンく
らいしかないが……」

それ、空氣と同類の主成分しかなによつに聞こえるのだが……

何処までも広がる草原地帯

空力クラリ4

平原

平原地帯での足にかかる負荷はどれほどの物か…考えるに値しない。

…考えてしまつのは、僕がバカなのか、おれがアホなのか、きっと、どうひらかであらう。

ああ、何時間経過したので有りつか、出口の見えないこの土地は、どこのまで永遠何だらうか。

「なー、お前。名前はなんと書つ?」

言葉数もつまり、話す話題さえも尽きてしまつた僕は、暗黙の了解で名前は聞かないことにしていたが、もう限界だった。

「名前は、言えない」

そうなのだらうとは、思った。

「…理由とかあるのか?」

無こと書つだらう。

「わからない」

わからない…か、両者にしても、僕の思つていた答えと同じ。少女には、出口が分かっているんだ。

「教えないのは、ひどいこととは思わないか？僕にも教えてよ名前

名前を知れば最後、どうしても僕のシナリオの歯車に、この少女が絡んで来るであろう。

そんな事はどうでもいいのだが。

「お前が悪いんだ」

言われるがままに、僕が悪いんだすべての現況において、説明書、携帯電話、旧友、幼なじみ、数学少年、孤立少女。

僕が、恨んだすべてだった。

。始まりは、海、浜辺の壊れたアナログ時計。小六の僕は、枯れた好奇心で時計を手にした。

頭が破裂しそうだった。悪夢としか言えない。小学生より学力が劣る僕。友人にいじめられる僕。幼なじみに見向きもされない死んでしまえとばかりに送る視線。少女までに、馬鹿にされ。携帯電話は、使えない。

時計は、先取りしてくれた。

僕は、そこで禁じ手を使った。

説明書は、世界の裏技が詰まつたマスター・アイテム。

僕は、願つた。誰もいなかつたところにじょりと…

それが叶つた、けれど、一つ未練を残していたようだ。

「お前は、俺だ。」

形や姿を変えようと、そんなの時間稼ぎに過ぎない結局、いつも
結末に繋がるんだよ。

「再帰は不能だ」

もう、いい誰が必要で誰が要らない人間かは、知り尽くした。あと
はお前だけだ。

「何を言つている？」

それはこいつの台詞だ。はつきり言つて見苦しいぞ。

「お前が名前を教えてくれなかつた時点で、なんだか、全ての事柄
に踏ん切りが付いた」

うつむく少女。

「お前は存在しない。ここも存在しない。もつと、言つなれば、今
こつしてこると言つ認識自体も幻。追加すると、お前は誰でもない。
俺の未練だ。消えろ」

消えるはずもない。まだこいつの名前を言わせなくてはいけないか
らな。

「お前は、誰だ？なぜ、どうして、ここに留まる？俺は死にたいん

だ！常識なんかに勝てるはずもない！未来を知っているからだ！」

神でもなった気分だぜ。 最初から、僕は真っ暗闇の孤独な落ちこぼれだ。前世があるのなら、前世からそうだった。辛いことは、生あむこと！それ以上の言葉は見あたらない。

「お前じゃ、一番の幸せモノだな、それだけ怒鳴れる元氣があるのだから…」

少女は、言ったとおり誰でもなかつた。

空力ラクラリ5

大地。

とても大自然な香りが鼻腔の感覚期間をくすぐる。要するに、土の薰りつてこと。

あけましておめでとう。僕は生まれ変わったのだ。大地と同等の位置に面し、大の字で仰向け、さらに足はかなり、虐めた。もう一生使用制限（高）くらい虐めまくった。

幸い長ズボンを装備していたとおかげで生い茂る稻によく似た雑草で擦り切れたことはなかった。

僕は、毎日年中無休と言つて善いほど、長ズボンを何となく履いていたのはこの時の為の調整期間だったと、自惚れ紛れに笑う。

「あつは、は、は、は」

世間の細波も返り討ちだ。と肩を並べ計れるくらい。爆笑する。

抱腹絶倒。のたうち回る。

横腹這い縦腹這い。

「え、決めが悪い……」

推定小学生にまで、寄生虫扱いな視線を送られる僕は、もひつ、壊れてしまったのである。」

しかし、これは絶好な機会だ。

この少女は、誰だか知らないが、もう他人だ。

他人イコール常識人種。

評価が低ければ、低いほど高評価！

ここで止まり、滯り、停滞しすれば…

やばい奴らいコール躊躇朦朧会の会員に、顔向け出来ない。リーダーとして、長として。

そこで僕は、

「今の ore、狂ってる？」

冷酷をすつ飛ばして、ドジ眼で哀れ単体運動会を繰り返す僕に、眼差しを送るのだ。

大丈夫、ベンチに頭を叩きつけるより遙かに難易度は低い。この勝負有利なのは僕だ。

何と戦つてゐる？

無論勿論、常識とぞ。

さつきの俯瞰な自嘲は、ドロヘ言つたかつて？それは、明後日の方向こそ。

「狂つてゐる人を視聴すると、なんだか、満たされるようで慣れ

ない。お前は、人としての反逆者なのか？」

少女、どの角度から聞いても、小学生と断定出来ない言葉の集合体をぶつける。

「はい～？お嬢様、なんと、おっしゃったのですか？」

僕は、単体運動会に飽きて、立ち上がり氣味に、片手を地べたに、添える。

「だから、醜い狼狽は止めると、言いたいんだ！恥を知れ！」

このお嬢さんも何処のお国から来来來られたのでしょうか？言葉並べが歴然として、厄介だ。

「お前」こそ、何語を用途爛々と口走つてんだよ！！素直になりたまえ！異国人民！」

僕一人、狂気に覚醒してしまい奇怪なステップを刻む。

「異国人民だと？抜かせば急かす花咲す。私の全てはこの世界一つだ！」

それ以外は、何もない！。

お前の事は、ずっと前に、お前から聞いただけだ！」

棒立ちと啞然が交差する。

「私はなーお前が生きたずっと、先の未来で死んだーこれは事実で、

お前は、私を助けた！。」

時間軸転送類の話か？

「私は、私は、…」

？

？

「外の世界をもう一度観てみたい…」

「

空力ラクリ6

現世

元の世界に戻る、簡単な過ぎる行事。

単純に、出口を探せば見つかるのと同じ。

簡単で単純。けれど、時間はとてもなくかなり掛かった。時間制限のなしだからと書いて、何億時間もさまよえる場所ではなかつた。

精神の方が先に駄目になつてしまつ。

時間はあつても、自分には勝てない。
と言つものだ。

それより、元居た世界の世界観が一層、珍奇な風土に思つてしまつのは、僕からしての考え方準がぶれてしまつたからなのだろうか。

まるで、古都な近代だ。

眩く物静かな街並み、樹林が少なく、コンクリの匂い、動くタンクステンの塊、軽自動車、鳥類の無駄な鳴き声、微量。

歩道は堅く、うつ伏せ寝なんて到底夢話。
建物は住居ばかりに、人しか居なそつだ。

「ここが私が生前世界の基礎か」

現に少女が未来人だとしても、過去を基礎とは絶対に言わないだろ。
これは未来を透視できない僕だけの違和感立つたりするのか？

「くんぴな町々で悪かつたな（ー」

怒鳴つてなどいない。発声の調節だ。

「先ず始めに言つておぐ。」リードは、僕は常識ぶつてゐる一庶民だ。平民でも凡人でも言つが善い。だ、け、ど、心はもつすでに手の施しようがないほど、悪漢奇人だ。怖くなつたら、元居た世界に帰れ！」

告げ口たたいて釘を刺す。

「アーリン告げ口呂きおつて、脅しにもならないわよ」

威勢は良好だ。問題なさそうだ。

「躊躇朦朧会会場。公園にいつか。？」

そつじやーこいつの名前、まだ決めてなかつたな。

「お前の名前を率直に即決する
お前は今日からコリ子だ。」

有無は言わせない。

「わたくつた」

とコリ子。

話の分かるやつで助かる。

「観手、質問があるが、一度、家に帰つたらどうだっただ、疲れているだ
ら？」

なんだその気まわしさ？

「それもやうか、…そうだな。」

よじと頷くコリナと僕は、一回田舎へ帰る方向に場面を移すこ
とにした。

「

家

「アハ母は、死ねー死ねよ」

僕はユリ子と言う少女をまな板で撲殺するのだ。
ジェル状の血液はあたり一面に飛び散り、内臓やら人骨やらが剥き
出しになるまで叩いたのだ。

一度はやつてみたかったこと。問答無用で人を殺すこと。一方的に
暴力をふるいたい。

始めっから、こうじとけば良かつたんだ。

常識に打ち勝つなんて無理だから、せめて生きている内にだれでも
いいから、思う存分、虐めたかった。

夢は叶う。かなったさ。

今僕は一番異常だ。人の血が若干、みずみずしくどうとしている
なんて、初体験だ。

これからどうする？

答えは、勿論、公園へあの公園行くのだ。

「さつさと、行かない、待っている

田曜日、今日はとつてもいい天気。

「

カラクリ24

公園

血塗れで道を歩く、観手。

街々の色とりどりの配置物を拝見しながら、闊歩する。

酷くいられた姿なのだが、あの少女は殺さなくてはならなかつたのだ。

理由は、あれを観られたから、動機はあれが見つかつたから。

それ以外の理由を探すのが難しい。

なに、あの少女は自己再生できる。

その設定は、おれが決めた。

ずっと、未来のおれが…

出なければ、遙か遠い未来で死んでいふことになるからな。

「可笑しそぎて、肝が抜けそうだ…」

周りの人間は、何食わぬ顔で通り過ぎて行く。

どうせ、目に見えるほとんどの人々は、普通に暮らし、普通に幸せ何だ。

おれは、少し異常なだけ、ほぼ人間だ。

当たり前が当たり前に出来ない俺達だ。

俺たちって事は、ほかにも仲間が入るのか?と読者側から疑問符を投げつけられそうだが

この話の濁流から描くに、その通りだ。

と答えてやる。この物語に登場する人物はみんな異常者だ。これだけイつておく、

それにして、主人公を演じるのも疲れてくる。
早めに、楔瓦の柵から解放されたい。

ぼくは、人に生まれた。

だからこそ、自由を何処までも求めたい。何から何まで、思い通りにしたい。

だからおれは、役者全てを完全に消し去る。

公園はいつもと変わらない…

公園到着。

「あ、觀手さんお帰り！」

と、キャラを変えたのか…似つかわしくない。口語でお出迎えするトウハウ。

「お前、気持ち悪いぞ。死んだらビリだ？」

血まみれな俺を観て、頭の中困惑してしまつてこるのだろ？

可哀想に、

「言つて置きますけど、私を殺すことは不可能です。」

本当に気が狂つてゐるようだな。可哀想、

「処で、イカリは何処にいる？まとめて葬りたい」

はいはい。纏めて、肉片で断片だ。

「イカリ君なら、リアルの紙芝居没頭中よ。か言つてくる」とはないのよね」

（気ままに）ルクティーを吸つトウハウ。

甚だしく訪ねる。

「お前、ミルクティー好きだな。いつぞ、ミルクティーにおぼれて死ね」

正直に本音を伝える觀手、正直な所。俺自身もミルクティーに飲まれて死ねたらどうのくらい幸せか解る…気がした。

「知らないのね。ミルクティーとは、ミルクが混入してゐるのよ、だからミルク」

優しい意味で困惑した。

知らなかつた。盲点を突かれたような感じ。ミルクとは牛乳。ティーは…多分、紅茶。

繋げて観ろよ。大変なことになるぜ。

「牛乳紅茶」

「それね。正解」

昔は、ペットボトルで空を飛べると本氣で思ったことに在るし、宇宙制服だつて使用とも思つた。

俺には、そんな力があるだろ?うか?…

在るかも知れないな。異世界渡り歩いたし…

「紙パックも再利用出来るのか?…俺そつとつ情報を収集するのが

に勝手ひいて書つか……不向きひいて書つか……」

少女を殺して、血まみれな俺を何食わぬ顔で田線を向けるトウハウ。

「再生用紙で紙飛行機を造つたら。宇宙まで行けるんじやない?」

ストローがし字に折り畳めるのもその所為か……

これは、どうだうな。

ハムをBlu-rayレコーダーに詰めたら明らかに、内部がハムスパイラルしていた。

公園の空気は、より美味しく感じたのは冷静さを取り戻し、正気を取り戻した頃合いの時間帯だった。

トウカラさんにすがるように、宥められ気がつけば5時だ。

沢山、人を殺した事がないのに…沢山殺した心境が芽生えそうでまならない。

俺は馬鹿だが、私を名乗るヒロインをそう簡単に殺すはずがない。これは、この世界の順番を引かないと行けないからな。

「お前、まず、三回観たら死ぬ絵を…一回見て氏ね。」

中身、空なミルクティーの紙パックを大事に持ちしゃぶるトウカラ。

「？」

見せしめに…語尾追加追加する。

「だの」

「？」

「明日は月曜日だな？」「ウハフ」

「うさ」

「鬱になつて氏ね」

「其れはダメ」

「だったら、今氏ね」

「其れもダメ」

「天気がいいから、蛇口に喉を突きつけて、史ね」

空は曇りだ。

「無理な話ね」

「お前は、誰だ？」

「私は、リッシュのよつた生き物よ」

「リッシュが喋るな（否定）。蒸発して消えれる」

悪運の多い日だ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7033w/>

カラクラリ。夕暮れ暮れる

2011年11月24日23時03分発行